

美里中学校との交流を通して —インターネットを利用しての交流学習—

The result of intercourse with Misato junior high school
—by using the Internet—

小 栗 信 (和歌山大学教育学部附属養護学校中学部)
Makoto OGURI(ogurim@center.wakayama-u.ac.jp)

ここ数年来、養護学校にもコンピュータが導入され児童・生徒の教育活動に利用されるようになってきた。また、インターネットをどのように障害児教育の中で使っていくかという先駆的な試行も始まっている。本校も美里町美里中学校との交流に際して、インターネットを利用して、電子メール・ホームページを使って事前交流を行った。

1. はじめに

本校中学部が美里町立美里中学校と交流を行うようになって16年になる。本校のような特殊諸学校の場合、集団の規模が小さく、一人ひとりの教育が保証される半面、一般中学校のように集団の中で切磋琢磨され、人と人がつき合っていくためのルールを学んだり、目標とする先輩やクラスメートから行動規範を学んでいくような機会が少ない。

そのためにも交流学習で一般中学校の生徒達と積極的に交わる中で、中学生らしい感覚や振舞い・行動に気づかせたい。また、美里中学校の生徒達にとっても交流学習を機会に、ありのままの障害児の姿を理解し、適切な関わりができる社会人に育ってもらうことが、養護学校側からの交流教育の願いでもある。

これまでの交流は、美里中学校が、平成元年・2年心身障害児理解推進校文部省研究指定校の年を除いては、生徒同士が実際に会って交流し合うのは年に1回であり、生徒同士の事前・事後の交流もほとんど行われていなかった。その大きな理由として、距離等の物理的な問題、カリキュラム・多忙な行事等の事情が考えられる。交流学習を学校行事の一つとして終わらせないためにも継続した交流が必要である。そこで、本年度はインターネットを利用した事前・事後交流を試みたいと考えた。

2. 本校のインターネットを利用した交流について

本校は平成8年3月末に児童生徒用として、マッキントッシュコンピュータ8台及び周辺機器が整備され、さらに4月には電話回線によるインターネット接続がなされた。

このような環境整備を受けて平成8年度的美里中学校・附属養護学校の交流学習は、従来の交流に加えインターネットを利用した交流学習を試みる事が可能になった。

現在本校が取り組み始めている児童生徒のインターネット利用（他校生徒との交流）は二つあり、一つは、「メディアキッズ」への参加であり、パソコンクラブの高等部生徒が「ひらがなの部屋」（バリアフリー）で他養護学校、小学校低学年の児童と交流を始めつつある。もう一つは、滋賀大学教育学部附属養護学校を中心とした「チャレンジキッズ」*での養護学校・障害児学級児童生徒に限定されたの学校間交流に参加している。

上記のようなBBS（電子伝言板）での児童生徒の交流は、1対不特定多数・不特定多数対1の交流であるため、自己紹介のやり取りのみで終わってしまったり、共通の話題がなくなれば関係も消滅するケースが少なくない。また、実際に合う機会はほとんどないので、コンピュータの向こうの「人」が見えてこない。まさにバーチャル（仮想的）な関係で終わってしまう可能性が多いと言える。

今回の美里中学校生徒とのインターネットを利用した交流は、想像したり、予想することが苦手である子も多い養護学校の生徒の実態をふまえ、「相手が見える」交流であるべきと考え、交流する相手をあらかじめ決めておき、名前・趣味・顔写真等を事前に交流できるようなインターネット交流を設定することにした。

*チャレンジキッズ

滋賀大学教育学部附属養護学校に「ファーストクラス」サーバーを構築し、全国の附属養護学校・公立養護学校・障害児教室と接続、障害がある子どものインターネット利用の在り方を共同実践研究しているプロジェクト。平成9年3月現在で20校が参加。

平成9年5月にはチャレンジキッズを通してインターネット交流をした東京光明養護学校と本校中学部3年が修学旅行で実際に会い、交流を深めた。

3. 交流学習計画

(1) www上での交流

本校ホームページとは別に、新たに非公開会員制ホームページ（URLを一般公開しない）を開設し、自己紹介・学校生活の様子・事前学習の様子・交流当日の様子等、を両校の生徒が知れるようにし、1対1交流以外の生徒の交流にも役立つ。

(2) 電子メールによる1対1交流

電子メールによる事前交流は、生徒1対1（両校7名ずつ）で交流させる。交流当日は、事前交流した生徒同士が同じ班になるようにする。

◎メール交換例（附属養護K2と美里中学M）

k君へ

はじめまして。K君。僕の名前はMです。

僕の誕生日は、1月10日で12歳です。K君の誕生日は、いつですか？

ではまた、返事ください。

Mくんへ

ぼくのなまえは、Kです。

たんじょうびは3がつ23にちです。

すきなたべものは、やきそばです。

すきなことは、からおけです。うるふるずの「ばんざい」をうたいます。

ぼくのうちは、「H」というらーめんやさんをしています。とてもおいしいです。

またおてがみください。

k君へ

お返事ありがとうございます。僕もらーめんが、大好きです。

歌では、歌うより聞くほうが、好きです。

話しかかわるけれども、K君の、学校では、一くらす何人いますか？

僕らは、男11人、女14人、合わせて、25人です。

僕は、一番好きな、教科は、体育です。K君は、どの教科が、好きですか？教えてください。

僕たちは、体育では、バレーを、やっています。K君たちは、何を、やって、いますか。

お返事、遅れて、すみません。またお返事下さい。

Mくんへ

ぼくのくらすは、6にんです。(おとこ3にん、おんな3にん)

ぼくのすきなきょうかは、たいいくです。

ぼくたちはいまたいいくで、げーとごるふのれんしゅうをしています。

21にちはがんばります。

またおてがみください。

k君へ

僕も、21日の、交流学習を、楽しみにしています。

K君からしつもんもしてきて下さい。

21日、あえるのを、たのしみにしています。

また、お返事下さい。

Mくんへ

きのうはありがとう。げーとごるふがたのしかったです。

かきもおいしかったです。

Hへもきてください

またおへんじください

(3) 実際交流

11月21日に美里町農村センターでゲートゴルフによる生徒交流

4. 交流当日の生徒同士の様子

指導者からみた生徒の様子

＜電子メールで事前交流をした生徒＞

- ・交流前からメールの相手を非常に意識し、交流当日もいきなり「Kちゃん」と呼ばれたことで、すぐになじむことができた。交流後も「遊びに来てほしい」等母親に話していた。(K2君)
- ・班に分かれての自己紹介のときメールの相手がすぐにわかり、握手を求めている。積極的に交流をすることができていた。(H1君)
- ・メールの相手はすぐに分かったが、ゲームには参加したもののみんなから離れたところにいたり、じっとうずくまっていることが多かった。もう少し時間があれば周りの生徒と打ち解けることができ、楽しく活動することができたであろう。昼食後は「ゴルフをしよう」と声をかけられるとうれしそうに参加できていた。(K3君)
- ・メールの相手はほとんど意識してはいなかったが、楽しく自然な形で交流ができていた。(Y2君)
- ・メールの相手はわかっていたが、本校生徒や先生にくっつきに行くことが多く見られた。しかし、昼食後は指導者の声かけもあり、昨年に比べると美里中の男の子と積極的に関わり、芝生の坂から落とし合いなどをして、楽しく遊んでいた。(M3君)
- ・メールの相手がわかり相手を意識していたが、積極的に話しかけようとはしなかった。ゲームに集中し、にこやかな表情で参加していた。また、自分から「ねえ、次はこっちかな。」等話しかけもしていた。(Y3君)
- ・美里中の生徒に出会ってすぐに女生徒の髪や服に触れていた。普段の「新しい事柄への消極的な態度」ではなかった。あこがれのような感情と思われる。来年は、ぜひ電子メールのような事前交流をさせてあげたい。(M1さん)

5. 反省と課題

インターネットの利用に関して

- ・技術力不足、環境の整備の必要性を感じた。将来的に本校も専用線とサーバーマシンを整備し、メール・ホームページの管理運営、また、「ファーストクラス」等のBBSソフトの構築を行っていききたい。
- ・インターネットによる事前交流は、当初は計画になかったため、行事・カリキュラムの関係で両校生徒で実際に生徒達が交流する時間をあまり確保できなかった。来年度以降はきちんと計画の中に位置づけたい。
- ・会員制ホームページに音声を入れることができれば、養護学校の生徒にとってもっと興味を引く内容にできたかもしれない。

6. 終わりに

今回の交流学習は、従来の交流に加え美里中学校と附属養護学校との「物理的な距離」をインターネットを利用して縮める方法を試行してみた。初めての試みであり、技術力もさることながら、アイデア不足な面もあり、また、結論を述べるには材料が少なすぎるが、当初の予想として、美里中学校の生徒たちにとって、事前に交流する相手を知ることが本校生徒との「距離」を縮め、本校の生徒にとっては、交流学習を楽しみにする機会になればいいという程度に考えていた。

しかし、今回の生徒の様子から、K2君のように会えることを楽しみにして、会ったとたんによろしくなってしまうたり、K3君のように自分のペースをつくるのに時間がかかったり、初めての経験にとまどってしまいがちな生徒にとって、事前に中身の濃い（たとえば共通の話題を作っておく等）交流をしっかりとしておくことで、当日の交流がスムーズに行えるのではないかと考える。また、普段は「新しい事柄に消極的な態度」を示しがちなM1さんだが、今回は同じ班の女の子とたいへん仲よくなった。この機会をとらえてのインターネットを利用しての事後交流は、彼女にとって様々なことに対して、積極的に動けるためのきっかけの一つになるかも知れない。以上のような事例からも「知的発達障害児のインターネットの教育利用」の可能性は大いにあると感じた。

また、美里中学校の生徒にもコンピュータ・インターネットを「健常者・障害者」を越えて、様々な人とのコミュニケーション・ツールの一つとして利用できるようになって欲しいと願っている。

今回の本発表を機会に、例年にはなかった「インターネットの教育利用」「担当者のインターネットを利用して事前打ち合わせ」「生徒の感想の交流」等を行うことができ、また、美里中学校職員の協力、和歌山大学教育実践センターの野中陽一先生はじめ情報教育研究プロジェクトのメンバーの助言を得、充実した交流学習にすることができた。この場を借りて、お礼を申し上げたい。

これからも、今年度の交流学習から得た課題をしっかりと検討し、更に、充実した交流教育を志向していきたい。

参考文献

- ・「チャレンジキッズダイジェスト'96」滋賀大教育学部附属養護学校・チャレンジキッズ共同研究校
- ・「電子学習共同体のデザインをめぐる ～ネットワーク上の学びのために～」山内祐平（大阪大学人間科学部）
- ・「めでいあきさずの冒険」新谷隆・内村竹志 NNT出版